

電気店が島内にないため、 しかないという沖縄県・黒 で修理に取り組む。



テレビの企画「ワンステップ!」に、本学工学部機械ロボティクス学科の男子学生4人が挑みました。5月17日(日)・24日(日)、TBS系列で全国放送されたのでご覧になった方もたくさんいらっしゃるかと思います。広島国際大学の学生が全国区のテレビ放送で、30分番組に2週連続出演するという快挙でした。放送終了後から熱いメッセージが寄せられ、その反響の大きさに驚いているところです。

6月18日(木)に「ワンステップからツーステップへ」というタイトルで、電化製品修理体験報告会を学内で開催しましたが、当紙面でも黒島を訪れた男子学生4人と同行した教員2人の「ワンステップ!」に参加しての感想および番組を見て感激したという方からいただいたメールを紹介します。



番組をご覧になった方から メールをいただきました。

【内容】

5月24日放送の「ワンステップ!」を拝見させていただきました。故障した電気機器を目の前にして、試行錯誤しながら修理していく大学生たちは、とても格好良かったです。特に、最後の3回生の篠原君の涙には感動しました。これからも学生自身の成長のために、また社会のためにも、あの活動を続けていって欲しいと思います。

M・Kさん

【内容】

昨日観た「ワンステップ!」に感動して、メールいたしました。私は物を作ること、ましてや壊れたものを修理することもできません。でも、皆さんは専門の技術をお持ちで無いのに、あらゆるものに対して「再生」という意欲を持ち、向かっておられましたね。特にミシンを修理された方、諦めるという気持ちもなく、最後までやり遂げたその熱意に、胸が熱くなりました。自分の修理した物が喜ばれ、その修理した物が新たな人の歴史を造り、受け継がれていく…。きっとあのお帽子はお嬢さんの一生の思い出ですよ。その思い出に大きな手を差し伸べたのは、間違いなく修理されたあなたです。その情熱を忘れず、大切になさって、素敵な技術者になってください。感動をありがとうございます。

A・Sさん

【内容】

ゆうべ、テレビを見ていたら、広島国際大学の機械ロボティクス学科の学生が沖縄県の島に行き電器製品や壊れた機械の修理をしている番組を偶然見つけて最後まで見てしまいました。3年生の学生たちでしたが、先生もお一人同行されていて、感動的でした。来週も続きがあるようで楽しみです。学生たちとてもいい体験ができているようでした。

すばらしい大学ですね。
岡山外語学院 蓮井さん



壊れた電化製品は捨てる島を訪れ、若者たちが無償



工学部 機械ロボティクス学科 3年 篠原 悟

大学の授業でロボットを学んでいるので、同じような電化製品も直して島の人に喜んでもらえればいいなと思っていました。

初めは、ロボットの事を学んでいる最中なのでその知識を生かし、1日一人2、3個修理するつもりでいました。しかし、電化製品はロボットと同じくらい複雑な構造をしていたので、すぐ何が原因で動かなくなったのか分かるものが少なく、ほとんどは分からなくすぐにつまずきました。それに人から預かった物なので、分解して余計に壊してしまう可能性もあり、修理するにも戸惑いが多かったです。

それでも、人に頼られることがほとんどだったので期待に応えたいという思いで頑張り、依頼された6割くらいの物を修理することができました。

黒島に行ったことで、人に頼られるうれしさや授業だけでは得ることができない経験ができました。それに今回は、修理した物を自分でお宅まで届けに行ったので、人の喜ぶ顔を直接見ることができたのが一番よかったです。この企画で得た自信と経験を将来生かせるように頑張っていきます。



工学部 機械ロボティクス学科 3年 石岡 賢太郎

黒島に着いてすぐに修理場のセットをしていて、本当に僕たちを信用してもらえらるかどうか悩んでいました。ですが、時間が経つにつれて一人また一人と電化製品を持ち込んで来てくれることに安心しました。修理を始める前に、大まかな故障状態を聞くのですが、やっぱり触ってみないと分からない所が多く、中にはネジ穴が潰れてはめ込めなかったり、回路の基板が一部錆びて断線していたりしていました。そういう少し技術的な部分で立ち止まると段々熱中してくるのですが、比較的簡単な作業なのに故障している部分に焦って考えず、結局時間がかかってしまうケースが多かったです。また、自分は臆病なので本体のカバーを開けた時に壊してしまう恐れを感じて、ほかのメンバーより2歩も3歩もペースが遅れていました。しかし、マッサージ器と電話機とラジカセの3点をおばあさんに届けに行った時に自分の不安を打ち明けると、「壊れている物を触らなかつたらずっと壊れたままだから、思い切って中身を見てみなさい」と言われ、自分の臆病な気持ちを切り替えることができました。ただ、思い切るのも大切なのですが、自分としては「～が起る恐れ」を常に予測しながら作業することもまた大切で、その調度いい両立を目指したいと思いました。「ワンステップ」を終えて感じたことは、人に関わるボランティアはこれが初めてで、遠く離れた場所での修理活動は不便なところもありましたが、黒島の人々は初対面の僕たちに明るく優しく接してくださって、修理するやりがいを感じるボランティアだったと思います。また、チームで行ったおかげで自分のできない所をメンバーに手伝ってもらったり、案を出し合ったりと、チームワークの大切さも学ぶことができました。



工学部 機械ロボティクス学科 3年 中西 拓巳

僕はこの「ワンステップ」を体験する前は、「知識がないのに自分に何ができるんだろう。何もできなかったらどうしよう」という不安でいっぱいでした。案の定、自分だけ何もできないまま3日間が過ぎました。みんなが次々と修理を終えていく中、自分だけが何もできずとても焦り、その焦りがミスを起こすという悪循環に陥っていました。

そんな中、ゼンマイ式の時計に出会いました。その時計は47年前に手に入れたモノで、集められた修理品の中で一番古く、中の構造が自分にとって未知のモノでした。引き受けたからには何とかして直したいという責任感が重くのしかかり、それが自分にとって大きなプレッシャーでした。

僕は、どこから手をつけていいのかわからなかったので歯車の掃除をしました。歯車に埃が溜まっていたゼンマイが動かなくなっていることに気がつき、47歳の自分の母を綺麗にするように丁寧に掃除をし、歯車が動きやすくなるように潤滑液をかけました。

時計をおばあちゃんの家を持って行き動かすと、初めて「ありがとう」という言葉を聞きました。僕はこの「ワンステップ」では、修理が出来ない中「島の人のため」から「自分のため」に修理をするようになっていました。そんな時に初めて修理が終わり、「ありがとう」という言葉を聞き、達成感を感じると同時に人のために何かが出来たことがうれしく思いました。

この「ワンステップ」を通して感じたことは、モノを大切にすることです。僕は、電化製品が壊れたらいつも新しいモノを買っていました。しかし、黒島の人たちは1つの電化製品を大切に使い、直せる事が出来るなら直したいという考えでした。その気持ちを、動かなくなった時計を通して学びました。



工学部 機械ロボティクス学科 3年 田中 将基

今回「ワンステップ」という番組に出演させていただき、電気店のない離島に1週間滞在し、壊れて困っている島の人々の電化製品を直すという貴重な体験ができました。電化製品を直すということは、普段大学の実技で行うことはありません。なので、知識も自信もないままに島に着いてしまいました。ですが、自分たちの状況とは関係なく島の人たちはたくさんの壊れた電化製品を持ってきます。実際自分も中を開けて回路を見たり、はんだ付けをするといった経験はなかったのですが、一度修理を引受けると直すわけが分かりません。そして、直す時に今度は自分の物ではなく他人の物から壊してはいけないという気持ちと直すせいといけなくという気持ちの葛藤が出てきます。とはええ、壊してはいけないという気持ちはあってもそれを払拭して直さないと先には進まないで、自分の気持ちを切り替えて慎重に直していきました。この体験を通じて、自分が無力なことや気持ちの切り替え、それから自分の引き受けた仕事への責任等いろいろなことを学びました。

番組出演交渉をした 呉学務課の藤友課長のコメント

「4月5日に日本のどこかの離島に出発、学生4人と教員も同行、他の大学にも同様に声をかけているので早くメンバーが決まったところが出演できます」と話を聞いたのがなんと4月2日。なんとしても本学の学生に行かせたいという強い思いと、毎週「ワンステップ!」を見ていたことも奏功、運良く出演が決まりましたが、実は交渉段階から不安がありました。「機械ロボティクス学科の学生が本当に電化製品を修理できるんだろうか、できなかったら番組は成り立たないし、局の方には迷惑をかけるし…」と次第に不安になっていったのも事実です。しかし、感動のシーン続出の放送を見て、「行かして正解だった、彼らの生涯忘れることのできない貴重な体験になった」と自分自身も達成感を味わうことができ、交渉の努力が実ったと安堵しているところです。

黒島電化製品修理の学生引率を終えて

工学部 助教 ● 重安 哲也 教授 ● 今村 信昭



重安先生



今村先生

我々は今回の学生引率に際して、参加学生が「何を感じ、どう動くか、そしてどう成長するか」について注意深く見守っております。当初、学生たちは持ち込まれる故障電化製品や日用品

の山に、そして同じ機能の電化製品でもメーカーによって大きく構造が異なるという状況に、手を出しあぐねて時間だけが過ぎるばかりでした。しかし、一つひとつではありますが、修理を終える度に学生たちは自信をつけ大きく成長しているように感じられました。これは、問題点の抽出・解決・評価というエンジニアに必須の実践能力が電化製品の修理によって自ら磨かれていったためと考えております。さて、修理を終えるたびに学生たちは、皆、笑顔だけでなく安堵の表情を一緒に浮かべていました。これは、「黒島の皆さんが自分たちを信用して託してくれた電化製品は絶対に修理しなければならない」という強い責任の下で作業に従事していたためだと思います。彼らは単に技術だけでなく、技術の向こうにある持ち主の生活を感じていたのだと思います。我々が扱う技術の向こうには必ず技術を使う人々がいることを学生たちが体得してくれたことは、技術教育に携わる者にとって何にも代えがたい大きな収穫であったと考えています。

さて、この度の日程は前期授業の開始直後で大学全体が多忙を極める時期でしたが、大学関係部署の皆様の温かいご理解と多大なご支援によりプログラムへの参加が実現しました。末筆ではございますが深く御礼申し上げます。どうもありがとうございました。

